1996.09.09　日本海新聞

# 本庄工区について独自の構想を提言

## 人と自然とのハイテク融合

小松電機産業社長

小松　昭夫氏

スポットライト

## 良質ヘドロで海洋牧場実現

―中海・本庄工区干陸に関して画期的な構想を提言されているそうですが、具体的な内容を聞かせてください。

「私はこれまでHNS（人間・自然・科学）研究所をつくり、人と水、食、街とハイテクの融合を考えてきたのですが、その一連の構想の一部です。ポイントは島根県が干陸を計画している一千七百㌶をそっくり水面で残し、反対に堤防と陸の間の五百㌶を埋め立て、そこを有機農業の拠点にするわけです。

「では水面では何をするかというと、まったく新しい栽培漁業、いわば海洋牧場。これまでの工事でできている堤防やポンプ場などの既存施設をそのまま活用します」

### 湖底に生命連鎖

―コロンブスの卵のような発想ですね。ただ、水質の問題が気になるのですが。

「本庄工区水域内の湖底に爆発的な生命連鎖を起こすわけです。その一番のもとになるのが厄介物と見なされている窒素、リン、ミネラル、すなわち有機物を多量に含んだヘドロです。具体的には水面上に新開発の装置を設置し、太陽光を光ファイバーで海底のヘドロに照射、バイオテクノロジーを活用して藻類を発生させ、その回りにプランクトンを成育させるわけです」

「この良質なヘドロは中国山地、宍道湖、中海周囲、島根半島から発生して中海に注いでおり、本庄工区はこの良質なヘドロの貯蔵庫となっているんですね。本庄工区は立地的に外的な影響を受けにくく、実験場としては最適なんです」

### バクテリア曼陀羅

―ヘドロが生まれ変わることで海洋牧場が実現できるということですか。

「それぞれの地域では生命はすべてバクテリアの支配下の中で成育しております。一言でいえば、『バクテリア曼陀羅（まんだら）』、本庄工区はそのメッカです。この曼陀羅を機能させるには、境水道側と大海碕の二カ所にコンピューター制御付きの水門を設置し、先ほど述べたシステムを連動させることが必要です」

―本庄工区の利用を通じて新しい産業を創造するわけですね。

「事業推進のために広く賛同者、投資家を募ります。地球家族時代の国家事業として財団法人格を持った研究所をつくり、二十一世紀を開く人材の育成をねらうものです。そして、栽培漁業関連▽有機栽培関連▽知的環境観光▽水処理施設関連▽総合企画研究―の五つの分野で上場企業を含めた企業群をおこすという構想です。名づけて太陽プロジェクト『ヒューマンテクノパーク』といいます」

―本庄工区については、いろいろな意見が出ていますが、周囲の反響はいかがですか。

「実は、既に五月に松江市内のホテルでこの構想についての発表会を開いたのですが、必ずしも地元の政財界で賛同を得られているというわけではないのが実情です」

「しかし、六月以降新党さきがけの代議士の方が多数来られ、私の構想を聞いた上でビデオをご覧になり、新しい流れが始まりました。また、次々に取材を受け専門日刊紙や経済誌にも紹介されました。また、単行本としても十一月に発刊が予定されています」

### 地球規模の共生

―壮大な構想ですね。新年度予算で調査費が計上される見通しとなりましたが、構想の実現化に向けての今後の計画はいかがですか。

「九月二十三日午後一時半から松江市のホテル一畑において、構想の発表と本庄工区の将来について話し合うシンポジウムを予定しています。そして、構想実現化のための研究会『ベンチャーアカデミー太陽』を発足させ、パーティーも予定しています。大企業の中からの参加者も多く、東京、大阪、海外からの参加者もあり、現在百五十人を超える方々から入会の申し込みをいただいています」

「これからは地球規模の共生と競争の時代。この研究会において詳細な事業計画をつくり、これに主体的にかかわっていく人、そして投資するベンチャーキャピタルなどが出て来る。これがこれからの事業創造のパターンになると考えています。既に、十社を超えるキャピタル会社から関心を寄せられています。相反するもの、関係のないものを矛盾なく統合する見極めとテクノロジー、すなわち高い理想を掲げることが大切です。私はその旗振り役を務めたいと思います」

（聞き手は田中仁成松江支社長）

〈プロフィル〉島根県八雲村。五十二歳。佐藤造機（現三菱農機）を経て、昭和四十八年に小松産業設立、同五十四年小松電機産業設立。高速シャッター、水処理システムで独自の技術を開発。これまでに中小企業研究センター賞、ニュービジネス協議会会長賞などを受賞している。